

●●●この夏フランス人のお客様2組●●●

ヨットで世界旅行の「コンスタンス号」一家

8月7日朝、津市のマリナーに到着したのはフランスのヨット「コンスタンス号」、乗組員はジャン・ジャック、アンヌ夫妻と長男のオーギュスタン君の3人。5年前にフランスを発って南下、大西洋からマゼラン海峡を回って太平洋に入り、フランス圏のニューカレドニアで働きながら滞在、このほど来日して東京経由で津に入港しました。3人は8月末に空路帰国しましたが、



1年間船を津港に預けて来夏またカナダ経由でフランスを目指すといひます。アンヌさんはかつて、三重日仏協会とかかわりの深く「ラヴェル弦楽四重奏団」(リヨン)のマネージャーを務めていた女性で、同団ヴァイオリニストの北浜玲子さんの紹介もあり、本会では滝澤事務局長を中心にフランス語が堪能なメンバーが活躍、津マリナーとの事務的な交渉のお手伝いや、お伊勢参りのドライブなどで歓迎しました。

8/27 ゴットマン先生のお兄さん夫妻を歓迎

ティエリー・ゴットマンさん(本会常務理事)のお兄さんパトリックさんと夫人のパスカルさんが、この夏のバカンスを利用して来日、木曽路、郡上踊り、熊野古道、伊勢神宮、沖縄と精神的に見て回られました。三重日仏協会では、お二人が帰国前に津に滞在されていた8月27日、役員、運営委員ら有志で、会員黒坂さんが経営する津市の「花咲」において歓迎会を催しました。お二人は、日本の新しいものと伝統的なものとの対照的な風景に興味深かった。食べ物もみんな美味しかった。これからまた1年よく働いて来夏もよいバカンスを楽しみたい、などと話していました。



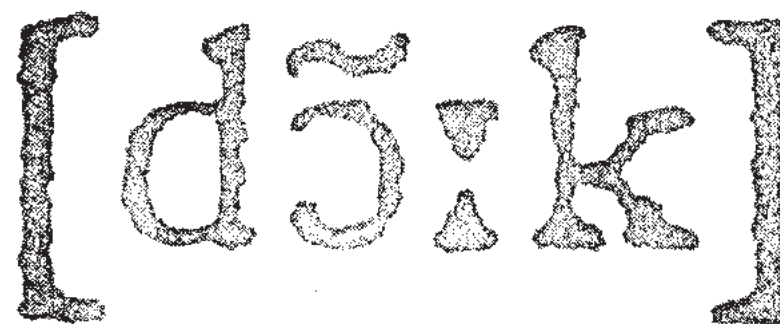
予告

11/19(木) 村林浩代「ソプラノリサイタル(後援事業)」

本会会員の村林浩代さんが、「秋風に誘われて・・・祈り、歌う」のタイトルで、イタリア歌曲や、カッチーニ、グノー、シューベルト3人の作曲による「アヴェ・アリア」など名曲を披露します。他に竹内幸子(ソプラノ)、兼重直文、尾崎敦子(ピアノ)の各氏、パール三重合唱団、合唱団「うたおに」が出演します。

日時: 11月19日(木) 19:00開演
会場: 津リージョンプラザお城ホール
入場料: (前売) 一般 2,000円 大学生 1,000円 高校生以下 500円
(当日) 一般 2,500円 大学生 1,500円 高校生以下 1,000円

新入会員紹介 前号以後、下記の方々が入会されました。(敬称略)
山本 昌弘 石橋 寛人 竹谷 咲華 古澤 操子 工藤 香菜



DONC どんく

N°105 septembre 2015 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059-226-2766
FAX

2015年度 定期総会
新会長に駒田美弘氏(三重大学長)を選出
記念講演「フランスの諷刺文化の意義」T・ゴットマン氏

2015年度総会は7月19日(日)津市のプラザ洞津で開催され、前年度の活動報告と会計報告、今年度の事業計画と予算計画を理事会の原案通りに承認しました。また任期2年の役員選出では、会長に駒田美弘(こまだよしひろ)氏を選出、他の役員はすべて再任されました。

駒田氏はこの4月三重大学学長に就任されたばかりの小児科のお医者さん。会長就任のあいさつでは、ちょうどこの7月上旬にパリの日本文化会館で開催された忍者シンポジウムに出席のため、三重大学の忍者研究スタッフや伊賀流忍者集団とともに、初めてフランスを訪問した経験などを話されました。

議事のあと記念講演に移り、本会常務理事で三重大学人文学部教授のティエリー・ゴットマン氏が「フランスの諷刺文化の意義」と題して、この1月テロの攻撃を受けた週刊新聞シャルリー・



あいさつする駒田新会長



記念講演のゴットマン氏

エブド紙の記事や、政治風刺で人気の高いテレビ番組「Made in Groland」の動画などを実際に紹介しながら話され、一部から下品、過激などの批判もある現代フランスの諷刺文化が、18世紀の啓蒙思想に源をもつ共和国の中心理念である理性尊重の精神の現れであって、人種・宗教差別などとは無縁であることをことを強調されました。さらにこのあと恒例の「パリ祭」パーティーではゲストを含む50人が参加、楽しい歓談のひと時を過ごしました。

会員近況紹介

どうぞよろしく

池内 琢 (いけうち・たく)

東京・狛江市の出身で、慶応義塾大の学部と大学院（修士）で仏文学を専攻しました。一年次の教養課程の必修語学がフランス語だったことが縁でした。英語にはない活用の多様さや言葉の響きの美しさに魅せられたのを覚えています。専門は現代小説でしたが、教授陣の知識は広く、18世紀の哲学者ディドロやルソーの著作などを原書で輪読したことも良き思い出です。

卒業後は中日新聞に編集職として入社。金沢、豊橋、名古屋勤務を経て、昨年8月に当地に赴任。三重総局で記者として働き、現在2年目です。戦後70年の節目の取材で、県内在住の広島、長崎の原爆被災者をはじめ、多くの戦争体験者のお話を伺う機会がありました。その中で思い出したのは、ノーベル文学賞を受賞した仏作家パトリック・モディアノの小説「1941年。パリの尋ね人<原題 Dora Bruder>」でした。

第二次大戦中、ナチスに占領されたフランスの新聞に、行方不明になったユダヤ人の少女の尋ね人広告が掲載されたことが、ストーリーの土台となっています。モディアノは、消息を絶った少女の足跡をたどり、戦争の悲惨さを明らかにしていきます。当地で私が体験談を伺った方は、当時10代の少年。日仏と国は違いますが、子どもに降りかかる戦争の不条理さは同じだと痛感しました。

三重日仏協会に入会させて頂き、会員の皆様の多彩な活動にいつも触発されています。今年こそ、「仕事が忙しいから」と言い訳をしてサボっていたフランス語の勉強を再開したいと思っています。特にフランス語会話。今は、スマートフォンのアプリでも生のフランス語が聞けるようになりました。要するに、自分のやる気次第ですね。

日本とフランスの文化を共通項にして、職業や年齢の違う方々が集う。そんな協会の活動は本当に素敵だと思います。新参者ではありますが、これからもどうぞよろしくお願ひいたします。



会員さんのお店情報

◆ ラグジュアリーレストラン<シャトー・ラ・パルム・ドール>が誕生

本会会員・後藤雅司シェフ経営のフランス料理店<LA PALME D'OR>は、8月2日、津市あかつ台の広大な敷地に新たに<シャトー・ラ・パルム・ドール>を開業し、9月5日からは120人が着席可能なウエディング会場もオープンしています。なお津市一身田大古曾の旧店舗は以前どおりの店名で、新しくカジュアル・カフェレストランとして7月から営業中です。

◆ <MONSIEUR>が敬老の日に洋菓子プレゼント

会員・伊藤洋一さん経営の洋菓子店<MONSIEUR>ムッシュー（津市八町）では、9月19日、地域の「敬老のつどい」に合わせて、近隣のお年寄り200人余に洋菓子を無料で届ける「社会貢献活動」を行うということです。

フランス人は古民家が好き (I)

矢野 隆 嗣

ジャン＝フランソワ・ダメーム氏（当協会理事）は来日して28年になる。6年前、松阪市の西部、堀坂山の麓に広がる丘陵地に建つ古民家を改造して移り住んだ。爽やかな風がわたる5月22日の午後、井土さん御夫妻と私たち夫婦でダメーム邸を訪ねた。その日は「世津子ダメーム展」の初日、会場はLA GRANGE（フランス語で穀倉の意）、つまり邸内にある蔵がギャラリーである。

蔵の中は静かでひんやりとしていた。連子窓から差し込む木漏れ日が、作品をやわらかく浮かび上がらせている（Fig.1）。陶板にモノトーンで描かれた少女たち……世津子ダメームの絵には静謐さが漂い、人を思索的にする何かがある。ブルーを背景に、仰向いている小鳥の絵に惹かれた。蔵の壁に激突して落命したツグミだという。真っ白な漆喰を空とまちがえた哀れなツグミは、マダムによって手厚く葬られ、絵の中に姿を留めることになった（衝突防止対策も考慮中とのこと）。

ダメーム氏にお願いして、ご自宅を見せていただいた。軒先にはツバメの巣が二つ、昼寝中の三毛猫の横をそーっと通り抜け玄関に入った。上がり框に一冊の「現代詩手帖」が……マダムらしい。フランスから船便で運んだアンティーク調家具の幾つか——それらが畳の部屋に不思議と調和していた。天井を見上げるとガイシ引き配線、皆が「懐かしいねえ」と声をそろえた。改築のほとんどをダメーム氏が手掛けたそう。

次いで、離れにあるダメームさんの書斎を拝見。フランス語訳の谷崎潤一郎、川端康成、安部公房、大江健三郎の代表作は一通り読んだという。村上春樹のペーパーバックが5冊積み上げられていた。「国境の南、太陽の西」「ダンス・ダンス・ダンス」「アフターダーク」「ねじまき鳥クロニクル」までは読み取れたが、「La Ballade de l'impossible」が分からない。家に帰ってから「ノルウェイの森」だと知った。セピア色のうすい小冊子が数十冊並んでいた。訊ねると祖母がリセ（高校）のときに使っていたテキストだという。バルザック、モリエール、ヴォルテール、ヴィヨン、パスカル——書棚の前で私はしばらく茫然と立っていた。大切に残すべきものとは……。

マダムを囲んで、女性たちは庭に咲き乱れる花の話で盛り上がりつつあった。二十種ほどの花の名前を耳にはさんだが殆ど失念。蔵の裏にも広い庭園があり、一部は菜園や花壇になっている。周囲の風景にとけこみ、グラデーションのように堀坂山の麓へと移行していた。

マダムが蔵の裏手にある祠に案内してくれた。丸い自然石に「山神」と刻まれている。この家に代々伝わる祖霊神だという（Fig.2）。

夫妻がこの古民家を終の棲家に選んだ理由について考えた。ナチュラルリストの二人、ダメーム氏のジャポニスム、われわれの祖父母の世代であれば、もう一つ「山の神のお導き」を付け加えるかも知れない。便利さと引き換えに我々が失った多くのことに気付かされた一日だった。サガン風のタイトルは井土さんの発案である。秋にはグットマン教授の古民家を訪れる予定である。第二弾に乞うご期待！



(Fig. 1)



(Fig. 2)